

# ☆駄菓子屋の店員

モン太

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

虚に両親を殺された主人公。身寄りの無い主人公に手を差し伸べる駄菓子屋の店長。彼は、店長を通じて世界を知る。

#神様転生は描写がありませんが、それに近い裏設定があるので一応付けています。アンチ・ヘイトも保険で付けています。

#文章が稚拙だったり矛盾点があったりしますがそういうのが無理だという方はブラウザバックをオススメします。キャラ崩壊やキャラ改変と過去捏造が含まれます。

# 目次

白髪の店員

1



## 白髪の店員

ここは空座町。日本のとある重霊地だ。俺はこの町の浦原商店に住んでいる。俺の名前は白波 颯斗（しらなみ はやと）、11歳。普段はジン太と雨、鉄裁さんで店のお手伝いをしている。とは言っても基本的に俺はサボリ魔だから、鉄裁さんの目を盗んではPOPでモ〇ハンとかゲームをしていたりする。

「バッター4番。花菱ジン太…。」

なんかジン太が箒で遊んでるけど、気にしない。俺は適当に座ってゲームをする。こんなに暑いのに庭掃除なんてしていられるかよ。太陽マジ勘弁。

俺は太陽の光を遮る様にパーカーのフードを被る。ついでにポケットに入れてた風船ガムを口に入れる。流星は駄菓子屋だね。おかげで風船ガムは好きだけストックできる。

暫く、クチャクチャとガムを食べながら、ゲームをしているとジン太と雨が喧嘩し始める。喧嘩と言っても、雨が一方的に虐められているいつもの光景だ。

「私の方が年上だよ。」

「歳とか関係ねーし。レベルが違うんだよ！」

歳がどうこうって言ってるけど、死神達から見たら、団栗の背比べだよな。一応俺は、3人の中では真ん中だ。

にしても雨はともかく、ジン太ってめちゃくちゃ怖い人相してるよな。なんせ、髪の毛ピンクだもんな。それでいて、あの口調にあの態度。雨もよくジン太に嘯み付くよな。関心するわ。

そんな事を考えながら、ぼーっとしていると、誰かが近づくと気配を感じる。ただの一般人ではなく、力は弱いけど霊力はある。たぶん前に来た、朽木ルキアとかいう死神だな。

朽木ルキアは雨を虐めているジン太の傘を奪う。あ、優しいんだな。

「相変わらずだな、チビ助。店長はいるか？」

「……………まいど……………」

そんな怖い顔でまいどって言う店員がいるかよ。まあ、いいや。俺もゲーム仕舞わないと。鉄裁さんの気配を感じるし。

ジン太が店の戸を開けると、中にはかなりごついおっさんが出てくる。鉄裁さんだ。

「こら、ジン太。開店にはまだ早い……って、朽木殿でしたか。」

鉄裁さんが朽木ルキアに、店員を呼んでくる旨を伝える。この絵すごいな。特に身長差が。2倍ぐらいあるんじゃないかね？

「少々お待ちを。今店員を起こして参ります故。」

「残念でした。今日はもう起きてるよ。おはよう。ジン太、雨、颯斗、鉄裁さん。そんないらつしやいませ、朽木さん。」

浦原喜助。俺は普段店長と呼んでる。店長は、二年前に俺を引き取った人だ。なんでも、元死神で隊長やっていたり、技術なんちやらかんちやらとか言う凄い組織を作ったそうだ。

「昨日、あつちから丁度仕入れてきたところですよ。今日は何をお求めで？」

そんでお客様の朽木ルキアさん。駄菓子を買いに来た訳ではなく、瀨霊廷から来た空座町担当の死神だそうだ。実力は俺を感じるに、最初会った時は、副隊長〈ルキア〉三席といった感じかな。でも、今は死神の力を一時的に失って、義骸に入って生活している。今回は、その義骸関係の商品についての商談と購入が目的のようだ。

「雨々。倉庫から持って来て。」

「あ、はい。」

「箱に新品って書いてあるから。」

雨が店長にパシラされる。雨はもう少し、しつかりしてもいいと思うんだけどなく。一番年上なんだし。まあ、本気出した時はあいつめちやくちや怖いんだよな。そう思うと俺って、一番平和的なやつだよなく。平和っていいね。それ以上に何か面白い事があ

れば、さらにもいいんだけど。

「これだけしか無かったのか？」

「そう言わないでくださいよ。それだって、2番人気だったんですから。」

義魂丸か。女性死神協会つても良くわからないセンスしてるよね。

「それよりも、いつまでも誤魔化せるもんじゃ無いっすよ。」

朽木ルキアと店長の間に緊張が走る。まあ、事情を知っている者なら、誰でもわかる。

瀨霊廷から来る死神達だよね。

「わかってる。」

—————

「これなんて読むか、呼んでみろよ。」

「そ、わる、ぴん？」

「粗悪品だ！粗悪品！すっげー悪い商品を客に売ったんだよ、テメーは！」

ジンの怒鳴り声が聞こえる。うっさいなく。どうも雨が、朽木ルキアに間違つて商

品を渡してしまったらしい。

「ふざけんなよ、テメー！ありえねー前髪しやがつて！」

「うっさい。ゲームの邪魔。」

「お前はゲームしてないで、店の手伝いしろよ！」



それ、お前が言う？

俺の内心のツツコミもまるで無視して、蹴ってくる。あーいてー。あーウゼー。

「(い)ら、(い)ら、喧嘩しない。」

「しかし、この義魂丸は困った事になりそうですね。」

「そうだねー。どっちにしろ、早目に片付けないとねー。彼がどんな事しでかすか、わからないし。」

確かにねー。改造魂魄なんて、野放しにしちゃうと何しでかすかわかなんないしねー。まあ、改造魂魄ぐらいなら、すぐに回収できるでしょ。

—————

浦原 side

彼を見つけたのは、本当にただの偶然でした。たまたま川辺を散歩していたら、一人の子供が堤防に腰掛けて、携帯ゲーム機で遊んでいるのが、目に止まりました。普通なら、特に気にはとめないのですが、見た目がかなり歪でした。白い髪の毛が目元が隠れるくらいに長く伸ばした前髪。白いパーカーを着て、フードを目深に被り、膝下ぐらいの長さの黒い短パンを穿く少年でした。私が驚いたのは、彼の眼。前髪とフードに隠れて見えにくいのが、良く見ると瞳の色はオレンジ色。しかも、何故か輝いて見えるような眩しいオレンジ色でした。その瞳はゲーム画面を見ているようで、その実何も見ていな

いかのようでした。

少し、変わった風貌の少年だなと見てみると、少年の真後ろの空間が、突然開き中からトラのような巨大虚が現れました。少年はまるで気付く様子も無く、ゲームに釘付け。巨大虚もすぐ目の前に獲物を見つけて、飛び掛かる。

「不味い！」

アタシは彼を助けようと瞬歩の構えに入りますが、突如彼の背後に無数の水の玉が浮かび上がり、水球からレーザー光線のように水流が射出され、巨大虚を一瞬で細切れにしてしまいました。

アタシが呆然としている間にも、彼は何事も無いかの様にゲームをしていました。あれは、彼がやった事なのか？しかし、彼からは霊圧の昂りを感じなかった。実際、ウォーターカッターで巨大虚が殺されている時も一切手を止めて無かった様ですし………。とりあえず、接触してみますかね。

「いや、見事なお手前で。」

「ん？おじさんもモン○ンやるの？」

長い前髪から、オレンジ色の眼が覗く。

それにしても、目が痛くなる様な色してますね。

「いえいえ。そつちじゃ無いっすよ。さっきの虚の方ですよ。」

アタシがそう言った瞬間、少年の目が見開かれる。

「おじさんも、さっきの化け物見えるの？」

「ええ、アタシも見えます。浦原喜助、浦原商店の店長しています。あなたは？」

私はポケットに偶然入った、風船ガムを差し出しつつ、自己紹介する。

「俺は白波颯斗。」

彼…… 颯斗は、私の風船ガムを手に取り、名前を応えてくれました。意外と警戒されなかったつすね。

「どうです？一人でゲームするのも楽しいかもしてないつすけど、アタシは寂しいと思いますよ。アタシんところに来てくれれば、他の駄菓子もありますよ。それに、少しお話を聞いておきたいですし。」

颯斗は、特に警戒するでも無く、アタシについて来ました。余りの無防備さに心配になり、親は居ないのかと問いましたが、親は虚に殺されたそうです。颯斗はその時に髪の毛の色が抜け、瞳の色が変色し、今の水を操る力を得て、虚を殺したそうです。

アタシは彼にこの世界の事や、アタシの今の状況を教えました。流石に崩玉の事は説明しませんけど。

結局、夜一さんと鉄裁さんで話し合い、身寄りの無い颯斗はうちの店員になる事になりました。

彼の戦闘能力の高さは恐らく、かなりのものでしょう。颯斗はかなり無自覚のようですけど。アタシはなかなか、いい拾い物を得たのかもしれないですね。